

〈一人ビブリオバトル〉

短い 20 世紀に捧げて

中西輝政編著『アジアをめぐる大国興亡史 1902~1972』

V S

黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト
1920 ~ 1970 年』

鈴木健吾

コロナ禍の大学生協の店頭で東ドイツ史の本が目立つと、思っていたらいつのまにかソ連史の出版広告が目立つようになっていた。今年、2021 年、所謂「短い 20 世紀」が終わっては、はや 30 年である。戦後の長期化と天皇の生前退位などの注目が戦後史への注目を集める一方、「総力戦体制」「1940 年体制」「貫戦史」などのかつて前衛的だった知的枠組みの一般化により、1945 年を断絶としない著作も目立つ。20 世紀が歴史化していけば、むしろ二つの総力戦——冷戦をいれればもう一つ増える——の時期が 19 世紀以前とも、総力戦体制と陣営戦が解除されたネオリベラルな 21 世紀とも違う、一ホブズボーム的な「短い 20 世紀」が析出するのではないか。制度としての「20 世紀学」などの苦戦を尻目にしつつも、そう思わずにはいられない。

評者は時代区分でいえば紛れもない戦後史（かつ一國史）の研究者ではあるが、今回は書評子として短い 20 世紀を描いた本邦の代表的な論者二人について筆を執った。この二人を対にすることについて、特にイデオロギー的側面から「うな重とショートケーキ」のような食べ合わせの悪さを感じる向きもあるかもしれない。しかし、国際関係史と社会運動史という一國史的アプローチに限界があり、一人の研究者が「越境」「貫戦」せざるを得ない二分野の著者として師弟ほどの年齢差に関わらず同時代に同じ獲物を追った

二人を対にするのは、実は自然であると考えている。試みの成否は読者に委ねたい。

○ 親英と親米の間で

中西輝政というのは因果な著者で「安倍晋三のブレーン」として、『正論』の筆頭著者として、情報史・諜報史の輸入者として目を引くたび、著者が一貫してイギリス外交史の研究者であったことを忘れそうになる。91年初出の「湾岸に沈んだ新秩序」の予言——アメリカ帝国の形成以前の瓦解——が、トランプの大統領選勝利で確定し、返り咲く花のごとく、雑誌論説で、書店で彼の名を再び見るようになるとなおさらである。故に中西輝政編著『アジアをめぐる大国興亡史 1902~1972』（PHP 研究所 2020年）は意外に思わせられる一冊ではあった。団塊の世代の保守系論客の代表として声名を誇った中西がイギリス外交史に戻ってくる——「表店」が新装開店するのかと。しかし「中西輝政古稀記念論集」と銘うたれた本書は、少し違う体裁を取った。中西の講筵に列した者を動員し、英米仏露独日を総覧する論文集を編んだのである。実用書出版社からの2000円弱という値段と「論文集」という体裁のコントラストがものめずらしい。

本編は4部14章に分かれるが、全体を俯瞰していこう。第I部「イギリス、アメリカ、フランス」第1章「英米「覇権交代劇」の世界史的インパクト」は編者中西が筆をとり、英米一体を自明とする細谷千博・三谷太一郎のような論者の諸説を批判、近衛文麿まで遡及し戦間期の英米不和を分析する。エリートの均質性が強いイギリスと政治エリートと経済エリートが分離したアメリカの差異、海軍軍縮や一次大戦債務をめぐって明確な親米派のチャーチルさえもが英米戦争の可能性を指摘する戦間期の時空間は初見ならば瞠目させられようし、保守系の論説の「オールドファン」であれば、外務省系のアングロファイルであった故岡崎久彦との関係性を思い起こすかもしれない。第2章奥田泰広「大英帝国のアジア撤退戦略と民主主義」は英連邦の形成に伴いイギリス植民地の独立性が強まる中でのイギリス人エリートと国民会議派との角逐を描く。第3章三島武之介「アメリカのアジア戦略と対日戦略の変遷」では世紀転換期のアメリカの外交政策の変遷を、特に社会進化論者セオドア・ローズヴェルトの言説から描いていく。第4章大野直樹「なぜアメリカはベトナム戦争の泥沼に陥ったか」はフランクリン・ローズヴェルト

のインドシナ信託統治構想から説き起こし、OSS とベトミンの友好関係という忘れられた歴史的記憶からアメリカのインドシナ介入を描く一方、第 5 章黒田友哉「フランスの対外戦略と「帝国の真珠」インドシナ」ではディエンビエンフーの惨敗で語られがちなフランスのインドシナ撤退過程をマンデス・フランス政権の登場などの政治課程も織り交ぜて描く。

第 II 部「ロシア、ドイツ」では、気鋭の執筆者を投入し国際共産主義と帝国主義が入り乱れる戦間期のユーラシアを描写する。第 6 章山添博史「ロシアの登場と東アジア地政学の変動」では帝政ロシアが 19 世紀半ばから急激に東進するなかで起こった非日本史的文脈での日露衝突への道が描かれる。最も若手の論者となる第 7 章伊丹明彦「北サハリン石油利権をめぐる米ソ協調」では、ワシントン体制論批判の文脈による 1920 年代初頭の米とロシア極東の極東共和国との北サハリン石油利権をめぐる交渉が極東共和国の外交を担ったスクヴィルスキーに着目しつつ叙述される。第 8 章佐々木太郎「ソヴィエト・ロシアの「積極工作」と日米対立」は agent of influence 概念の本邦における導入者でもある佐々木がレーニンの革命輸出工作の一環としてのアジア戦略をドイツ共産党のミュンツェンベルクのネットワークを中心に論じていく。第 9 章山添博史「共産中国の誕生から米中接近まで」は唯一執筆者が重複する章で、地政学的観点から見た米中接近の意義が描かれる。第 10 章大原俊一郎「一九二〇年代のドイツ外交の変容と東アジア」は一次大戦で敗戦国になったドイツが大国への復帰を模索する中で超歴史的なドイツの東西バランス外交政策と絡んで浮上した中独ソ連合構想や 1920 年代段階での日独連携構想などを丹念に追っていく。

第 III 部「日本」は本書中最も重厚な執筆陣をそろえた部といえよう。第 11 章小山俊樹「帝国日本とアジア主義」は近代日本が日本の国際的地位の向上と帝国化に伴う「自存自衛」の狭間で揺れ動く日本のアジア主義を宮崎滔天・岡倉天心から重光葵・大川周明まで系譜的に描ききる。第 12 章小谷賢「一九三〇—四〇年代の日本陸海軍の戦略の変遷」では本書のテーマを裏打ちするような題材、仮想敵が陸海軍で分離していた日本が仮想的な「英米可分論」のもと、いかに南進論にふりきっていくかについて帝国国防方針をはじめとする方針・要綱を検討していく。第 13 章森田吉彦「敗戦国日本の再建と政治指導者」は外交官出身者が首相になりやすかった時期としての初期戦後を幣原喜重郎・吉田茂・芦田均・重光葵という四人の担い手の思想と行動を比較することで論じていく。

かくのごとく論考編が終わり、第IV部はお楽しみ、書名と同じ題の座談会である。中西と執筆者五人（小谷・森田・山添・奥田・大野）により、歴史としての米英可分論からロシア革命・共産主義というファクター、果ては現状の日本の対米自立（従属）にまで広範な領域の議論を展開する。同ゼミの教員と師弟だけでソースとファクトがついた形で広範囲の話題を押し切るのは圧巻であり、京大の「人環現代史」草創期の功労者としての中西もはっきり像を結ぶ。

既述のとおりの特異な出版形態もあり、率直に言って概説原稿と新規性の高い原稿が入り乱れている感じはぬぐえず、形態論的な意味での工夫の余地があるのは隠しがたい。しかし、親アングロサクソンなれど親米ならざる独自の外交批評で一時代を築いた中西のイギリス外交史家としての復活とあわせて、類書の少ない佐々木・伊丹の原稿を含めて日英同盟から米中和解までを通覧したのは20世紀の列強の外交史概説と当初の目標の「論文集」とを両立した野心的な編集ともいえる。『大英帝国衰亡史』から24年、アングロサクソンの大陸政策よろしく実は主戦場から撤退していなかった名匠の一冊。

（税込1980円 427頁）

○「世界で一番正しい共産党」への岐路

21世紀劈頭に記された『日本の内と外』で伊藤隆は列強を目指して坂の上の雲を駆け上がり、雲上で国際共産主義と戦った近代日本史の最後を野坂参三の粛清と宮本顕治の引退で締めくくった。「共産趣味者」ではなかった十代の評者には全く意味がわからなかったが、今となっては碩学の慧眼はその巻頭や巻末に現れるのがよくわかる。政治史的な「上部構造」では負け組であるし、はたまた完璧な「下部構造」とも言いがたいが、短い20世紀の日本がその党派の強い影響力の下にあったのは、れっきとした事実であるからである。ことに共産党研究はソ連崩壊後の国際的なコミンテルン研究の伸展や共産主義者や知識人個人での研究が進み、最前線が那邊かが他分野にはわかりにくい——「一国史」研究者と「社会運動史」という特殊史の研究者に分かれた状況が目立つように思える。誰もがNARAやロシアのアルヒーフにアクセシビリティを持っているわけではないので仕方がないが、そろそろ「アメ亡」や「延安」に目が届くような共産党史が現行の水準でほしい

— そう思っていたのは評者だけではないだろう。

国際と国内が交錯する分野が一人の貢献のみで完結するわけもなく、その最期まで日本共産党に寄り添った「黨員歴史家」犬丸義一とおそらく終始「トロツキスト」であり、ドイツ共産党日本人班という失われたピースを追った加藤哲郎とのどちらが偉大だったかなど格付けランキングほどの価値もない。しかし、一つのパラダイムとしての共産党史で先着したのはそのどちらでもなく、その両方に親炙しつつ「家事・子育て・育児と並行して研究を続けた」(『帝国に抗する社会運動』315頁)黒川伊織であった。黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本の коммуニスト 1920～1970年』有志舎 2020年 は既述『帝国に抗する社会運動』に次ぐ二冊目の単著であり、20世紀前半の東アジア(日中朝)の共産主義者ネットワークを通覧したその研究を通史に結晶させた一冊である。

11章構成の本書を概観してみよう。「はじめに」で天安門事変の経験による党派的な左派への批判が旧来の帝国主義研究とは異なる、一国主義的共産党研究を超越する研究手法の採用を宣言する。第1章「東洋の小さいインタナショナル」を目指して」では明治末年の社会主義冬の時代を経た日本が1919年前後の相次ぐ総合雑誌の刊行と東大新人会／早稲田民人同盟などの結成によって再起、一方ウィルソンの民族自決原則の制定が中国人・朝鮮人の覚醒を促し、ヴォイチンスキーによるコミンテルンの上海拠点が形成される様相を描く。第2章「国際共産主義運動と「日本の運命」」では山川均・近藤栄蔵によって第一次共産党が結党、近藤の検挙により日本の官憲にも露呈する。大韓民国の臨時政府のコミンテルンへの協力・陳独秀に一本化される前の中国の共産党(大同党)片山潜の系譜を引く東アジア統一戦線などをたどりつつ、コミンテルン中央の「鉄の規律」に服さなかった第一次共産党が解党していくが、第3章「中国革命下の上海—東京」ではモスクワでの片山潜と佐野学の角逐を尻目に東京に結集していくアジアの共産主義者を考察する。朝鮮人による日本人の植民地支配への無自覚への批判が始まる一方、中国人の革命組織が孫文死後の国民党の内紛によって分裂していく。第4章「国際共産党日本支部日本共産党」の誕生」はコミンテルン支部としての日本共産党の建て直しの模索が始まる。福本和夫の登場により日本共産党内の理論的支柱が移行する一方、コミンテルン中央の評価は上がらない。その結果として27年テーゼにより日本の革命戦略が強固なロシア革命モデルに変貌する一方、同年の上海クーデターにより中国で国民党と共産党が断絶、王

学文・廖承志ら日本留学中の中国人留学生 коммуニストが帰国していく。三・一五／四・一六の検挙により第二次共産党も壊滅に追い込まれる。

民族の連帯と革命の両立という夢が散る中の第5章「一国一党の原則」と外国人 коммуニスト」は本書の昏い第二部の幕開けといえよう。国民党との対戦の圧力で中国共産党が属地主義を明確にする一方、ジノヴィエフ書簡による英ソ断交によって資本主義国との提携路線が崩壊、コミンテルン中央が一国一党の原則を明確化する。台湾共産党結党が模索される一方、朝鮮共産党の苦戦を尻目に在日朝鮮人の労働運動への組織化が進んでいく。第6章「ソ連防衛」のために」ではソ連本国の第一次五ヵ年計画（1928～）の「弾よけ」として各国プロレタリアートが動員される中、折からの世界恐慌も後押しし極左暴力主義が横溢していく。田中清玄率いる武装共産党が国内の共産主義者の覇権を取り人民から遊離する一方、獄中では本来モスクワと日本とのクーリエが精々だった徳田球一が日本共産党史の執筆と裁判での陳述を開始、日本共産党の正統を創出しつつあった。黒川の業績として代表的な獄中の徳田の描写は冷静な筆致ながら手に汗握る。第7章「弾圧と抵抗に抗して」は上海・ドイツ共産党などの諸連絡ルートの閉塞、プロレタリア文化運動全体の弾圧による資金源の枯渇、佐野学と鍋山貞親の転向、ソ連での大粛清開始を経て本当の冬が訪れる。記述内容の予想がつきやすそうな章に見えて、アメリカ共産党と野坂参三の連絡線、船員系の共産主義者グループなどに目を届かせつつ、転向声明の言説分析をするという現下の研究水準をはっきり示しているといえよう。第8章「戦前／戦中／戦後の連続と断絶」は1935年の袴田里見検挙以後の「空白の十年」を「神話」と言い切り、関西圏の労働運動の長期持続や延安・重慶での日本兵の捕虜への共産主義浸透工作などが描かれる。本章は章の内部で「貫戦」を遂げ、府中の牢獄から徳田球一らが出獄、日本共産党朝鮮人部をはじめ旧植民地人含む外国人を傘下に置く。徳田神話が浸透する中、プランゲ文庫に残る「愛される共産党」を示す党細胞の新聞は必読といえよう。

東アジアにも冷戦が訪れる。国共内戦での共産党優勢が確定し、中ソ朝の共産党・労働党が枢軸を形成するが、第9章「中国革命と「極東コミンフォルム」」では二・一ゼネストの中止と社会党躍進による片山哲政権の樹立のさなか、新生共産党の歩みは議会主義と直接行動主義の間で引き裂かれていく。1949年の選挙大勝と団体等規正令による締め付けが並行する中、コミンフォルム批判の出来で党の分裂が始まる。阪神教育闘争などの朝鮮人単独

の直接行動を支援せず、しかしながら朝鮮人を「特殊工作隊」的に編成していく様は一國主義の罪と罰を余すところなく描いていよう。第 10 章「朝鮮戦争下日本の共産主義者」では中国共産党の直接介入のもと朝鮮戦争の後方攪乱のため武装闘争路線に傾斜する日本共産党を描く。徳田が北京機関で自己批判を迫られ、日本残留組が国内で武装闘争を呼号する中、学生黨員主体の山村工作隊・中核自衛隊が形成、日本の独立前後には火炎瓶闘争が展開する。奄美・沖縄の共産党組織の形成や「人民艦隊」などを通じて形成された北京機関の丹念な描写も魅力といえる。第 11 章「東アジア国際共産主義運動の「五五年体制」」では 1953 年のスターリンの死と朝鮮戦争休戦のさなか、東アジア全体で吹き荒れる粛清の嵐の一環として共産党史を描く。北朝鮮での南朝鮮労働党系が粛清され、中国でも満州を基盤とした高崗が斃れ毛沢東神話が確立する一方、東アジアの平和共存路線への転換に伴い内政不干涉路線により華僑・朝鮮人は共産党から離脱、植民地を失った日本にあわせるごとく日本共産党は「国民化」していく。1955 年 7 月の六全協による武装闘争路線の完全な放棄による直接行動に従事した黨員の切捨てとスターリン批判以後の新左翼の分離、そして 60 年代を通じたソ連・中国・北朝鮮との断交による自主独立の党の形成と、それと並行した前衛神話の崩壊が掉尾を飾る。

中野重治の「雨の降る品川駅」を挿入し、「帝国の共産党」・「生きられた経験」・「第一次共産党は、スターリンを知らないままに終わった」(56 頁) など口ずさめるようなフレーズを並べる叙述は詩的でさえあり、渡政こと渡辺政之輔が台湾で横死するシーン(99～101 頁) などどあわせ史劇を見るような感がある。しかもドラマチックであるのみならず、たとえば戦間期の日中に査証が不要であることなど、細部への目配りも欠かさない。日本史学としての社会運動史と国際的なコミンテルン研究は有機的に関連し、ここに再び架橋された。

ただ、金字塔は本物のそれとは異なり、乗り越えられるためにある。本書をはじめとする共産党史の研究が進み、共産党神話の解体が進むほど、なぜ宮本顕治執行部のような革命の裏切り者が共産党を執権し、その彼らの率いる「日和った」共産党が社共統一戦線の下最多議席を獲得、与党化さえささやかれるにいたったのか——実在する議会政党たる日本共産党の栄光と 1980 年代下以降の物語がわかりにくくなってしまうのだ。黒川より年少の著者の手による宮本顕治の後見人、蔵原惟人の評伝(立本紘之『転形期芸術

運動の道標』晃洋書房 2020 年) が出版された今、次のフロンティアは海外の文書館ではなく、もしかしたら巷間の共産党トークにあるかもしれない。「世界で一番正しい共産党」の系譜学は実はまだ始まったばかりである。

(税込 3080 円 370 頁)

自評を自薦するのは自家撞着の極みであり、「ビブリオバトル」とは銘打ったが、バトルの結果は読者に委ねたい。最後の文句は月並みに「今年は第一次共産党の「本当の」結党から百年～」とするつもりで準備していたが、実はイギリスのスエズ以東からの撤退から半世紀であることにも気がついた。見切り発車の「うな重とショートケーキ」は意外と食卓＝書架に合うのかもしれない。

※著者の敬称は原則省略した。読みやすさに考慮し、副題などを適宜省略した箇所がある。